

古典文学 作中人物事典

●學燈社●

作中人物を追う楽しさと難しさと
古代前期文学の作中人物35人
古代後期文学の作中人物170人
中世文学の作中人物170人
近世文学の作中人物180人
収載作中人物一覧



古典文学作中



人物志

國學第三十四卷九号 改裝版

學燈社

古典文学作中人物事典

一九九〇年一月二十日 初版発行
一九九〇年十月十日 二版発行

編者 國文學編集部

発行者 石井時司

印刷所 大盛印刷株式会社

東京都新宿区西早稲田三ノ五ノ一〇
郵便番号 一六九

発行所 株式会社 學燈社

振替 東京四一三六二五三
電話代表(五二七)二〇五四

國文學増刊(一九九・七)改裝版

太郎 伊吹童子 秋月物語 弁の草紙 浦島太郎 さゝやき竹 唐糸
草紙 あきみち 福富長者物語 さいき 一寸法師 鉢かづき 能「隅
田川」 能「班女」 能「鉢木」 能「自然居士」 能「鉄輪」 能「松風」
能「熊野」 能「恋重荷」 能「定家」 能「善知鳥」 能「歌占」 能「葵上」
狂言「武悪」 狂言「右近左近」 狂言「箕被」 狂言「花子」 狂言「鈍
太郎」 狂言「髭櫓」 狂言「悪太郎」 景清 百合若大臣 入鹿 愚管
抄 六代勝事記 五代帝王物語 神皇正統記 梅松論 2 水鏡 2 増鏡

島内景二 武藤元昭
沢井耐三 諏訪春雄
徳田和夫 加藤敦子
田嶋一夫 原 道生
西 一祥 池山 晃
松岡心平 近藤瑞男
橋本朝生 三浦広子
麻原美子 古井戸秀夫
延広真治

●●● 近世文学の作中人物 180人 ¹⁴⁰

恨の介 竹斎 浮世物語 おあん物語 おきく物語 薄雪物語 東海道名所記 二人比丘尼 伽婢子
5 狗張子 2 英草紙 繁野話 莠句冊 垣根草 2 唐錦 好色一代男 2 諸艶大鑑 武道伝来記
男色大鑑 2 西鶴諸国ばなし 4 椀久一世の物語 好色一代女 好色五人女 7 本朝二十不孝 3 日
本永代蔵 3 武家義理物語 世間胸算用 5 西鶴置土産 万の文反古 4 浮世親仁形氣 世間妾形氣
風流曲三味線 御前義経記 根南志具佐 風流志道軒伝 傾城禁短氣 新色五巻書 3 雨月物語 9
西山物語 遊子方言 2 本朝水滸伝 金々先生栄花夢 江戸生艶氣樺燒 傾城買二筋道 東海道中
膝栗毛 2 桜姫全伝曙草紙 浅草觀音利益仇討雷太郎強悪物語 善知鳥安方忠義伝 昔話稻妻表紙
本朝醉菩提全伝 3 椿説弓張月 2 春雨物語 5 南総里見八犬伝 13 近世説美少年録 2 修紫田舎源
氏 仮名文章娘節用 2 春色梅児誉美 4 夢想兵衛胡蝶物語 正本製 2 白縫譚 児雷也豪傑譚 八
笑人 北雪美談時代加賀美 七偏人 曾根崎心中 堀川波鼓 冥途の飛脚 国性爺合戦 博多小女郎
浪枕 心中天の網島 女殺油地獄 播州皿屋舗 夏祭浪花鑑 菅原伝授手習鑑 2 義経千本桜 仮名
手本忠臣蔵 4 本朝廿四孝 桑名屋徳蔵入船物語 神靈矢口渡 妹背山婦女庭訓 恋娘昔八丈 桂川
連理柵 伽羅先代萩 2 金門五山桐 新版歌祭文 敵討天下茶屋聚 加賀見山旧錦絵 近頃河原達引
伊賀越道中双六 隅田川続傳 五大力恋絨 伊勢音頭恋寝刃 絵本太功記 天竺徳兵衛韓斬 桜姫
東文章 東海道四谷怪談 3 助六由縁江戸桜 佐倉義民伝 与話情浮名横櫛 小袖曾我薊色縫 三人
吉三廓初買 2 八幡祭小望月賑 勸善懲惡視機関 青砥稿花紅彩画 小栗判官 さんせう太夫 かるかや

●古代前期文学の作中人物35人¹⁴

古事記14 日本書紀7 丹後
国風土記逸文 肥前国風土記

万葉集2 日本靈異記10

●古代後期文学の作中人物170人²⁶

竹取物語4 落窪物語3 うつほ物語10 源氏
物語22 浜松中納言物語5 夜の寢覚5 狭衣
物語5 とりかへばや物語2 有明の別 堤中
納言物語3 伊勢物語6 大和物語6 平中物
語2 簗物語 多武峰少将物語 更級日記 栄
華物語2 大鏡2 栄華物語大鏡18 今鏡2
玉造小町壮衰書 三教指帰 将門記2 陸奥話
記2 道賢上人冥途記 狐媚記 法華経験記6
江談抄4 本朝神仙伝 拾遺往生伝2 俊頼
髓腦2 今昔物語集40 古本説話集5 袋草紙

●中世文学の作中人物170人⁸³

保元物語4 平治物語5 平家物語23 承久記2 太平記7 義経記
4 曾我物語6 信長公記 信長記 太閤記 太閤さま軍記のうち
甲陽軍鑑2 発心集5 古事談4 続古事談3 今物語 宇治拾遺物
語10 十訓抄8 古今著聞集5 閑居友3 撰集抄6 沙石集10 雑
談集 松浦宮物語 風につれなき物語 我が身にたどる姫君 海人の
刈藻 石清水物語 西行物語2 いはでしのふ 恋路ゆかしき大将
秋夜長物語 三人法師 為世の草子 猿源氏草紙 文正草子 物くさ

古代前期執筆

佐藤マサ子

金井清一

西宮一民

都倉義孝

鈴木武晴

多田一臣

辻 英子

古代後期執筆

吉海直人

室城秀之

長谷川政春

高橋 亨

森 一郎

池田和臣

大朝雄二

池田利夫

永井和子

石埜敬子

神野藤昭夫

小林茂美

雨海博洋

高橋正治

竹鼻 績

高田祐彦

小町谷照彦

柳町時敏

海野泰男

藤原克己

安部元雄

山岡敬和

大曾根章介

篠原昭二

小林保治

池上洵二

藤本徳明

小峯和明

森 正人

田口和夫

高橋 貢

林 恒徳

●作中人物を追う楽しさと難しさ

久保田淳

●収載作中人物一覧⁸

中世執筆

柄木孝惟

兵藤裕己

鈴木則郎

山下宏明

佐伯真一

松尾葦江

久保田淳

長坂成行

長谷川端

徳江元正

山西 明

江本 裕

三木紀人

伊東玉美

田村憲治

浅見和彦

野口博久

乾 克己

志村有弘

小島孝之

木下資一

松下道夫

近世執筆

市古夏生

鈴木健一

堤 邦彦

谷脇理史

篠原 進

檜谷昭彦

富士昭雄

森川 昭

白倉一由

長谷川強

本田康雄

高田 衛

浅野三平

中山右尚

山本陽史

小池正胤

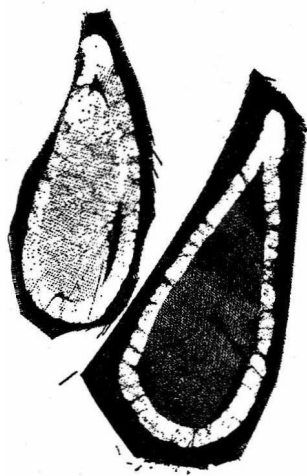
長島弘明

内田保広

板坂則子

佐藤 悟

古典文学作中人物事典



作中人物を追う楽しさと難しさ

久保田 淳

江戸時代、地方からやってきた侍が芝居を見物していて、善人が悪人どもに迫害される筋にたまりかね、「それがし加勢申す」と拔身を持って舞台へ駆け上ったので、その幕がおじさんになつてしまったという話があるそう。今でもわれわれの多くは、登場人物達の性格や行動に共感したり反撥したりしながら、映画や演劇を観ている。全く共感や反撥を覚えなかつたら、これらのものを観る意味はほとんど無いといつてもよいであろう。

物語や小説の場合も同様であると思われる。「賢きを見ては、及び難くともこひねがふ縁とし、愚なるを見ては、自ら改むる媒とせんとなり」(発心集・序)というのは、余りにも功利的な文学作品の読み方のような感じもするが、文学にそのような側面の存することも事実である。また、現実には深く傷つき、愁いを抱いている人々は、物語や小説の中に自身同様、あるいは自分よりもっとみじめな人々の生を見出して、慰藉されたり、鼓舞されたりすることがあるであろう。『レ・ミゼラブル』を読む功徳にそのような要素があることは否定できない。或いはまた、専ら楽しみとして文学作品に接する人々は、現実世界にはありえないような美男美女や想像を絶する悪人や魔神が縦横無尽に活躍する、たとえば『アラビアン・ナイト』のような物語世界を愛するであろう。

いずれにしても、われわれを物語や小説に向かわせるのは、主

としてその中に登場する人間群像である。美しい風景描写は物語や小説の大切なスパイスではあるが、物語小説世界で中心に据えられるのは、何といつても人間の魅力である。

それゆえ、物語や小説の登場人物を批評することによってその世界に近づくという方法も、古くから行われてきたことであった。その最も典型的なものが、中世初頭の『無名草子』であるが、それ以前、『枕草子』や『源氏物語』絵合の巻などでも、似たような形で物語受容の例は多く見出される。

をかしく物きよくいひつる人かな。かたちも清けなりと見つるほどに、交野の少将をかたちよしとはめ聞かせ奉りつるにこそ、見まうく成りぬれ。……文だに持て来そめなば、かぎりぞ。かれはいとあやしき人の癖にて、文一くだりやりつるが、はづるゝやうなれば、人の妻、みかどの御めも持たるぞかし。さて身いたづらに成りたるやうなるぞかし。

(落窪物語・巻一)

こま野の物語は、古蟬かみはがし出でて持ていきしがをかしきなり。ものうらやみの中将、宰相に子生ませ、かたみの衣など乞ひたるぞにくき。

(枕草子・大系本二二二段)

なよ竹の世々に古りにける事をかしきふしもなけれど、かぐや姫のこの世の濁りにも穢れず、はるかに思ひのぼれる契りたかく、神世のことなめれば、浅はかなる女、目及ばぬなら

むかし。

(源氏物語・絵合)

史書を繙く楽しみに、一国や一族の興亡を彩った多くの人の生涯を追う楽しみがあるとすれば、文学作品を読む喜びとして、自分と似た人、自分とはかけ離れた人、さまざまな人々にめぐりあえる喜びがある。そして、日本の古典文学とされているものには、かつては史書としても扱われた作品も多く含まれている。今回、編集部の依頼で選定した古典文学の作中人物五五人が、架空の人物のみならず、かなり多くの歴史上の人物を含んでいるのもそのためである。これらの人物の選定に際して、上代では金井清一氏、中古では篠原昭二氏、近世では森川昭氏に多大な協力をお願いした。近世では劇文学の作中人物が多くなってしまったので、これを絞り込もうとしたが、うまくいかなかった。全体を通じて、この機会に引張り出した、比較的無名の人物が少ないように思う。そういう人物を探し当てるためには、やはり個の作品をもっと読み込んでいなければならない。何かを選ぶということは自身の力量を試されることだという思いを、今回も味わう結果となった。

著名人でも、中世でいえば、鴨長明や兼好など、自身文学創造に関わった人達を逸している。兼好はたとえば『太平記』や『吉野拾遺』に登場する彼を見る手もあったであろうが、前者では余りにも気の毒だし、後者だといかにもそらざらしい気がする。といっても、それぞれの作者はそのような人間として兼好を捉えたのであってみれば、それらを取上げることとも全く無意味ではないのかもしれないが、やはり『徒然草』の著者というイメージが余りにも強いために、つい見送ってしまった。

西行の場合は、『西行物語』の主人公という形で取上げたが、むしろ『古今著聞集』での西行の方が面白かったかもしれない。同書巻第十五宿執第二十三の、西行が徳大寺家の公達に次々と幻滅する話(四九四話)や、巻第二釈教第二の大峰修行の話(五七話)などは、少なくとも橘成季の時代に描かれた西行像を考える際には見逃せない話である。そして、それにとどまらず、それが西行の本当の姿を伝える手懸りを全く含んでいないと断言できるであろうか。

風巻景次郎氏は『西行』(昭和二三刊、建設社)において、右の四九四話を中世的な伝説と見なそうとしている。すなわち、氏は次のように言われたのであった。――「山家集その他に徳大寺関係の歌の少ないのを以て、何か西行が徳大寺の人々と気心のしつくりしない事に因由するかに考へるのは、既に頗る中世的な西行観の伝統墨守であり、中世的な小説の許容に外ならぬ。そもそもその振り出しは、古今著聞集巻十五に見える後徳大寺実定の訪問の条、篤居させじとして「寝殿の棟に縄を張」つたのを見て、実定の心事を輕蔑してしまつたとあるやうな、既に頗る伝説化された所伝に存したのである。そこでは実定の弟実家、さらには四弟公衡まで、一束にして輕蔑し去られてゐる。私どもは、個々の事実に於て中世の霧を払拭する要があるばかりではない。西行その人の人間的存在の形式を見るにも、決して中世の伝説によつて錯覚を生ぜしめられぬやうにする用意が必要である。」(同書七三頁)『古今著聞集』という作品中の人物としての西行を考えるのであれば、「篤居させじ」の話が事実であろうとなかろうと一向に構わないが、氏の言われる「西行その人の人間的存在の形式を見る」ためには、要するに西行の真の姿を捉えようとする際には、

いかげんな伝説を参加させる訳にはいかない。風巻氏の発言の趣旨は確かにその通りであるが、ではこの話は本当に荒唐無稽なものに過ぎないであらうか。

この話は、仮にそのことが実際に起こったとして、その時期を想像させる手懸りをかなり多く含んでいる。まず、西行は「多年修行の後、宮こへ歸りて……後徳大寺左大臣の御もとにたどりまいるて」、「とびすへじとてはられたる」繩を見て、実定に愛想を尽かす。次に、「あながちに利をもとめたる御ふるまひうたてし」という理由で「実家の大納言」の所へも尋ねて行かない。「実守の中納言」はもはや失せている。そこで、その猶子となった「公衡の中將」を菩提院に訪れ、庭の桜を眺めているその風流貴公子ぶりに感心するが、彼が「中將成経朝臣」や「大藏卿宗頼朝臣」に超えられて、藏人頭のポストに就けなかったにもかかわらず、自分の勧告を無視して世を背かないので、「無下の人にておはしけり」と、最後に残った公衡をも見限ってしまったというのである。

日本古典文学大系本や新潮日本古典集成本でも指摘しているように、藤原成経や藤原宗頼が藏人頭に補されたのは、文治五年（一一八九）七月十日のことである。同じ時に任大臣があつて、実定は右大臣から左大臣に栄進した。実守の死は元暦二年（一一八五）四月二十五日、実家の任権大納言、公衡の任右（或いは「左」か）中將は共に文治二年十二月十五日である。すると、「後徳大寺左大臣」という呼称だけは後の官職を遡って用いたとすれば、西行が最初公衡を訪れたのは文治三年から五年までの春のある日のこととなる。実家や公衡の場合も、後日補任した官職で呼んでいるとすれば、文治二年の春であることも可能である。

ところで、西行は文治二年八月十五日には鎌倉鶴岡八幡宮のあたりを徘徊し、折から参詣の源頼朝に引留められて一夜を語り明かしたのち、東大寺再興沙金勧進のために陸奥の同族藤原秀衡の許へ下っていったことが、『吾妻鏡』によって知られる。「多年修行の後、宮こへ歸りて」という四九四話の語り方からは、公衡訪問はやはりこの陸奥旅行の後のこととした方がふさわしいようではあるが、しかし、文治二年には「二見浦百首」を勧進している。そして、公衡はその作者の一人であった。すると、西行が最初に公衡を訪れたのはやはり文治二年春のことであつたかもしれない。西行は文治六年二月十六日に、河内の弘川寺で円寂した。従つて、もしもこのことが事実であつたとすれば、これは西行の最晩年のことに属する。そして、人物関係、それらの人々の人事の日付けなどの点においても、これといった齟齬は見出されない。それを全くの伝説と断定してよいであらうか。

公衡が藏人頭のポストを逸して沈淪の意識に捕われていたらしいことは、別の資料から裏付けられる。すなわち、藤原定家が文治五年十一月十三日左少將に任ぜられた「よろこび」を、公衡は「身にうらみありてこもりあられたりしころ、三日をすぐして」（拾遺愚草・下）送ってきたのであつた。そして、同年十二月三十日従三位に叙せられている。彼はそのために慈円に祈禱を依頼したらしい。『拾玉集』には、

文治六年に公衡中将祈禱成就之後、遺卷数返事之次、皆水精念珠弘法大師三鈔等送給、つゝめる薄様にかきつけて侍歌

さりとともとおもひ／＼て祈けむこゝろの根よりはなぞさきそむ
(五二二)

西王母桃花始開候了、向後弥其憑候歟

返事に申つかはす

いのりつる心のねよりさく花はやがてかひ有みとぞなるべき

(五二二)

祈念之間兼日有「夢想告、果以叙三位中将了」

という贈答がある（歌番号は私家集大成、以下同）。このような願望を抱いていた公衡に、他人に蔵人頭のポストを占められたからといって出家をするふんざりなどがつかなかったことは当然であらう。となると、『古今著聞集』四九四話は、少なくとも公衡の心理状態に関してはかなり正しく伝えていることになる。

公衡は西行入滅を定家とともに悲しみ、かつ讃嘆した一人である。

建久元年二月十六日、西行上人身まかりにける、をはりみだれざりけるよしきゝて、三位中将のもとへ

もち月のころはたがはぬそらなれどきえけんくものゆくゑか
なしな
(二八〇八)

(左注あり、略)

返し

紫の色ときくにぞなぐさむるきえけんくもはかなしけれども

(二八〇九)

『拾遺愚草』下に見出されるこの贈答歌は多くの『西行物語』の末尾にも採られている。

また、実家は慈円の依頼によってか、西行の自歌合を清書していることが、『拾玉集』から知られる。

円位上人十二巻歌合の滝原下巻書て遣すとて

大納言実家

こゝろさしふかきにたへず水ぐきのあさくも見えぬあはれか
けなん
(五三四八)

かへし

こゝろさしふかくそめける水ぐきはみもすそ河の浪にまかせ
つ
(五三四九)

実定はいざ知らず、公衡や実家が西行入滅後その面影を偲んでいたことは確かである。それなのに、西行の方がその実家や公衡を見限っていたとすれば、西行はまさにひがひがしく「たてゝしかりける」人物であったと言わざるをえない。が、風巻景次郎氏はやはり『西行』において、人々に出家を勧める西行について、「年不惑にして出家を人にすすめはじめてゐる西行の精神史を読み取るに、決して真の意味の高僧智識とは受け取れない。彼の体臭の頗る強いおしつけがましい態度である」（同書二一四頁）とも書いておられる。そのような彼の一種のおしつけがましさは、この『古今著聞集』四九四話にも鮮かに描き出されているのではないだろうか。

この話が事実かどうかは、もとよりこれまでの手続きではわからないのだが、西行を包んでいる「中世の霧を払拭する」際に、この話をも伝説として押しやってしまうことには、「待った」をかけた。あくまで説話として楽しむ立場はもとよりあって当然だろうが、その一方でこの「説話」から西行の「人間的存在の形式を見る」ことも不可能ではないと思うからである。

古代前期

古事記

伊耶那岐命
天照大御神
須佐之男命
天宇受売命
大國主神
神武天皇
沙本毘売
倭建命
神功皇后
仁德天皇
女鳥王
木梨輕太子
雄略天皇
眉輪王
日本書紀
顯宗天皇
聖德太子

一九八 一八八 一七八 一七七一 一六一 一六一 一五五 一五五 一四四 一四四

蘇我入鹿	二五
有間皇子	二六
天智天皇	二〇
天武天皇	二〇
大津皇子	二〇
丹後國風土記逸文	二〇
水江の浦の嶼子	二三
肥前國風土記	二三
弟日姫子	二三
万葉集	二三
勝鹿の真間娘	二三
葦屋の菟原娘	二三
日本靈異記	二三
道場法師	二三
役の行者	二三
長屋王	二三
吉志火麻呂	二三
智光	二三
置架臣鯛女	二四
檜磐嶋	二四
大蛇に犯された女	二四
死後も舌が朽ちな	二四
かった法華経読	二五
誦の禪師	二五
道鏡	二五

古代後期

竹取物語	かぐや姫	三
庫持の皇子	大伴御行	三
石上麻呂足	落窪物語	三
落窪の君	継母	三
あこぎ	うつは物語	三
清原俊蔭	俊蔭の女	三
藤原仲忠	三春高基	三
忠こそ	あて宮	三
源仲頼	神南備種松	三
藤英	源実忠	三
源氏物語	光源氏	三
頭中将	空蟬	三

夕顔	三
藤壺中宮	三
紫上	三
末摘花	三
六条御息所	三
朱雀院	三
瀧月夜の君	三
花散里	三
明石の君	五
朝顔	五
夕霧	六
玉鬘	六
女三の宮	六
柏木	七
落葉宮	七
薫	七
匂宮	八
宇治の大君	八
浮舟	八
浜松中納言物語	九
中納言	九
大君	九
唐后	九
大宰大弐の娘	四
吉野の姫君	四
夜の寝覚	四
寢覚の君	四
男君	四

大君	女一宮	大宮	狭衣物語	源氏の宮	飛鳥井の君	女二の宮	一品の宮	とりかへばや物語	女中納言	尚侍	有明の別	姫君	堤中納言物語	花桜折る少将	虫めづる姫君	はいずみの女	伊勢物語	昔男	二条の後	夫を信じる女	夫を待つ女	斎宮	惟喬親王	大和物語	季繩	武蔵守女
四二	四二	四二	四二	四二	四二	四二	四三	四三	四四	四四	四四	四四	四五	四五	四五	四五	四五	四六	四六	四六	四七	四七	四八	四八	四八	

うはなりこなみ	源信	賀陽良藤	芋粥に憧れた五位女
生田川の女	囚人救済に命を賭	伊香の郡司	生霊となつて夫を
葦刈りの男	けた春朝	藁しべ長者	殺した女
遍照	狐を愛した男	鬼に唾を懸けられ	浅茅の宿の女
平中物語	源雅通	た男	化狐を生捕りにし
平中	鷹取りの男	恋に引かれて修行	た滝口
恋をいどむ女	大蛇になつて男を	した僧	茨田重方
簗物語	追つた女	大江定基	藤原為盛
簗	江談抄	侍の身代りになつ	猫を恐れる男
多武峰少将物語	吉備真備	た若君	原清廉
高光の妻	伴善男	増賀	自分の影に怯えた
更級日記	源博雅	讃岐の源大夫	勇士
竹芝の皇女	菅原文時	下野公助	女盗賊に愛された
栄華物語	本朝神仙伝	后に恋した聖人	男
永平親王	都良香	滝口の道範	民部大夫則助
承香殿女御	拾遺往生伝	伊吹山の三修禅師	妻を盗賊に犯され
大鏡	浄蔵	伯父の妻を盗んだ	た男
大宅世継	相応	男	水銀商人
菅原道真	俊頼髓脳	強盗を切り殺した	平中
栄華物語・大鏡	志賀寺の法師	男	犬と結婚した女
藤原安子	藤原惟規	力士を試した学生	古本説話集
藤原師輔	今昔物語集	女の秘部を治療し	赤染衛門
藤原義孝	久米の仙人	た医師	源融
藤原兼家	北山の餌取り法師	保昌を襲つた強盗	曲殿の姫君
藤原兼通	源信の母	源頼信	真福田丸
藤原道兼	敦賀の女	継子を殺して後継	信貴山の聖
藤原道長	蛇を救つて龍宮へ	を狙つた女	袋草紙
藤原伊周	行つた男	猿神を退治した男	和歌に生きた能因

とした尼	二八	恋路ゆかしき大将		あきみち		式子内親王	一三	源頼家	一五
侍従房	二八	恋路ゆかしき大将		秋道の妻	二七	能「善知鳥」		六代勝事記	
蛇を継娘の聲にし				福富長者物語		能「歌占」	二三	源実朝	二七
ようとした継母	二九			乏少の藤太	二六	能「葵上」	二三	五代帝王物語	
母を養うために盗	二九			さいき	二六	渡会家次	二三	後醍醐天皇	二七
みを犯した童	二九			さいきの本妻	二六	能「養上」	二三	神皇正統記	
強盗法師	二九	三人法師	二四	一寸法師	二六	六条御息所	二三	後醍醐天皇	二七
葛城山のほとりの		強盗の僧	二四	一寸法師	二六	狂言「武悪」	二三	梅松論	
山がつ	三〇	為世の草子	二四	鉢かづき	二六	武悪	二三	足利尊氏	二八
雑談集		為世	二四	鉢かづき姫	二六	狂言「右近左近」	二三	新田義貞	二八
宋へ派遣されよう		猿源氏草紙	二四	能「隅田川」	二六	右近	二三	水鏡	
とした男	三〇	猿源氏	二四	能「班女」	二六	妻	二三	惠美押勝	二八
松浦宮物語	三〇	文正草子	二五	能「班女」	二六	狂言「箕被」	二三	井上皇后	二八
弁	三〇	文正つねをか	二五	班女	二六	狂言「花子」	二三	増鏡	
風につれなき物語	三〇	物くさ太郎ひちか	二五	能「鉢木」	二六	夫	二三	源有房	二九
関白の次女	三三	す	二五	佐野源左衛門常世	二六	狂言「鈍太郎」	二三	近世	
我が身にたどる姫君	三三	伊吹童子	二五	能「自然居士」	二六	鈍太郎	二三	恨の介	二九
姫君	三三	伊吹童子	二五	自然居士	二六	狂言「髭櫓」	二三	恨の介	二九
海人の刈藻	三三	秋月物語	二六	能「鉄輪」	二六	男	二三	竹斎	二九
三位の中將	三三	姫君	二六	先妻	二六	狂言「悪太郎」	二三	竹斎	二九
石清水物語	三三	弁の草紙	二六	能「松風」	二六	悪太郎	二三	浮世物語	二九
伊予守	三三	弁公昌信	二六	松風	二六	景清	二三	浮世坊	二九
西行物語	三三	浦島太郎	二六	能「熊野」	二六	悪七兵衛景清	二三	おあん物語	二九
西住	三三	さくやき竹	二七	熊野	二六	百合若大臣	二三	おあん	二九
いはでしのぶ	三三	西光坊	二七	能「恋重荷」	二六	入鹿	二三	おおく物語	二九
二位の中將	三三	唐糸草紙	二七	山科の莊司	二六	鎌足	二三	おおく	二九
		万寿	二七	能「定家」	二六	愚管抄	二三		

文屋秋津	一七	米八	一七	心中天の網島	一八	桂川連理櫓	一八	清玄	一八
捨石丸	一七	仇吉	一七	治兵衛	一八	長右衛門	一八	東海道四谷怪談	一八
宮木	一七	お長	一八	女殺油地獄	一八	伽羅先代萩	一八	お岩	一八
樊噲	一七	夢想兵衛胡蝶物語	一八	与兵衛	一八	政岡	一八	伊右衛門	一八
南総里見八犬伝	一七	夢想兵衛	一八	播州皿屋舗	一八	貝田勘解由	一八	直助権兵衛	一八
犬塚信乃	一七	正本製	一八	お菊	一八	金門五山桐	一八	助六由縁江戸桜	一八
大山道節	一七	清七	一八	夏祭浪花鑑	一八	石川五右衛門	一八	助六	一八
犬飼現八	一七	小稲	一八	団七九郎兵衛	一八	新版歌祭文	一八	佐倉義民伝	一八
犬田小文吾	一七	白縫譚	一八	菅原伝授手習鑑	一八	お染	一八	佐倉宗吾	一八
犬坂毛野	一七	若菜姫	一八	菅原道真	一八	敵討天下茶屋聚	一八	与話情浮名横櫓	一八
大村大角	一七	児雷也豪傑譚	一八	松王丸	一八	安達元右衛門	一八	与三郎	一八
大川莊介	一七	児雷也	一八	義経千本桜	一八	加賀見山旧錦絵	一八	小袖曾我 色縫	一八
大江親兵衛	一七	八笑人	一八	いがみの權太	一八	お初	一八	清心	一八
伏姫	一七	左次郎	一八	仮名手本忠臣蔵	一八	近頃河原連引	一八	三人吉三廊初買	一八
船虫	一七	北雪美談時代加賀美	一八	高師直	一八	お俊	一八	お嬢吉三	一八
玉梓	一七	藤浪由縁之丞	一八	大星由良之助	一八	伊賀越道中双六	一八	和尚吉三	一八
浜路	一七	七唄人	一八	早野勘平	一八	唐木政右衛門	一八	八幡祭小望月服	一八
里見義実	一七	喜次郎	一八	お軽	一八	隅田川続傳	一八	縮屋新助	一八
近世説美少年録	一七	曾根崎心中	一八	本朝廿四孝	一八	法界坊	一八	勸善懲惡觀機関	一八
末朱之介晴賢	一七	徳兵衛	一八	八重垣姫	一八	五大力恋誠	一八	村井長庵	一八
お夏	一七	堀川波鼓	一八	桑名屋徳蔵入船物語	一八	源五兵衛	一八	青砥稿花紅彩画	一八
修紫田舎源氏	一七	お種	一八	徳蔵	一八	伊勢音頭恋裏刃	一八	弁天小僧菊之助	一八
足利光氏	一七	冥途の飛脚	一八	神靈矢口渡	一八	福岡貢	一八	小栗判官	一八
仮名文章娘節用	一七	忠兵衛	一八	お舟	一八	絵本太功記	一八	小栗判官	一八
小三	一七	国性爺合戦	一八	妹背山婦女庭訓	一八	武智光秀	一八	さんせう太夫	一八
金五郎	一七	和藤内	一八	お三輪	一八	天竺徳兵衛韓斬	一八	さんせう太夫	一八
春色梅児養美	一七	博多小女郎浪枕	一八	恋娘昔八丈	一八	天竺徳兵衛	一八	かるかや	一八
唐琴屋丹次郎	一七	毛刺九右衛門	一八	お駒	一八	桜姫東文章	一八	石童丸	一八

太安万侶・撰述

古事記の伊耶那岐命

(上巻)

神世七代の最後に成りいで、天神より国土修理固成の命を受け、妹伊耶那美と共に海中に游能基呂島を出現させて降り、大八島国等の島々を生む。さらに国土の諸要素たる岩、土、住居、海川山野、食物、火等の諸神を生むが、火神迦具土出生によって美神は死ぬ。跡を追って黄泉国を訪れるが、見るなを禁を犯して醜態に変貌した妻の姿を見て逃げ帰り、黄泉比良坂で絶妻の誓いをする。黄泉の汚れを滌ぐ禊によって、天照、月読、須佐之男の三貴子が化生すると、高天原、夜の世界、海原の分治を命ずるが、須佐之男だけはこれに従わないので追放する。紀本文では三貴子も岐美二神から誕生したとし、黄泉国訪問も語られていない。一書の中には記と同型のものもや、岐神が鏡を物実^{モノノミ}に単独で三貴子を化生せしめたとする所伝もある。隠棲地について、記は淡海の多賀とするが、紀本文は淡路之洲の幽宮とし、天上に報命の後、日の少宮に留ったとする異伝を併記している。

(佐藤マサ子)

太安万侶・撰述

古事記の天照大御神

(上巻、中巻)

伊耶那岐の禊でその左目から化生し、高天原の領有統治を任じられる。高天原を訪れた須佐之男には武装して対し、相互に宇氣比し、物実により子を生み合う。その後須佐之男の勝さびの乱行で天の岩屋戸にさし隠り、高天原、葦原中国は暗闇と化すが、諸神の合力や、天宇受売の働きにより出現して再度光を齎す。大国主が治める葦原中国は、宇氣比生みで生まれた忍穗耳が領有すべきだとして高御産巢日と共に降臨を命じ、忍穗耳の子邇邇芸が天降る。神武天皇の軍が熊野の神の毒気に弊れると、霊剣を遣わして危機を救う。紀本文では岐美二神の遵合により、日神大日靈貴が天下の主者として誕生したとし、化成説は記と同型の所伝の他に、左手の白銅鏡から化成したとする所伝を一書に記す。紀本文天孫降臨条では、高皇產靈尊が降臨を司令する。崇神紀には、皇居内に祭られている天照を笠縫邑に遷したこと、垂仁紀にはさらに伊勢へ遷したことなどが語られている。

(佐藤)

太安万侶・撰述

古事記の須佐之男命

(上巻)

伊耶那岐の禊で鼻から化生し、海原の統治を任じられるが、命に背き泣哭して根国行きを望んで追放される。事情を告げに高天原に天照を訪ねるが疑われ、宇氣比して物実を交換し、神々を化成させて潔白の証明を図る。勝に乗じて暴逆を働き(勝さび)、天照は岩屋戸に隠ったため追放される。大気都比売を殺すが、これが五穀生成の起源となる。訪れた出雲では八俣大蛇を退治し、草薙大刀を得、須賀に宮を造り、櫛名田比売と結婚して八島土奴美等が生まれる。根国を訪れた大穴牟遲に数々の試験を課した後、葦原中国を統治する大国主となる事を命じて娘須世理比売を与える。紀本文は岐美二神から誕生(一書では岐神が首を廻し顧る時に化成)し、雄健な性質故、根国へ逐われたとする。宇氣比生みの物実や化生した神、勝敗規準には異同がある。出雲国風土記は飯石郡須佐郷がこの神の鎮座地だとする他、事跡を地名起源とする例や、この神の子だとする在地神を記している。

(佐藤)